



ふたつの家の ちえ子



今村 葦子



NDC 913

342p

201mm×150mm

評論社の児童図書館・文学の部屋

商標登録番号 第730697号 第852070号 登録許可済

児童図書館
文学の部屋

ふたつの家のちえ子

昭和61年5月10日 初版発行

定価 1,200円

著 者 今 村 華 子

発 行 者 竹 下 晴 信

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 凸版印刷株式会社

発行所 株式 評論 社

(〒162) 東京都新宿区筑土八幡町17

電話代表 (260) 9401

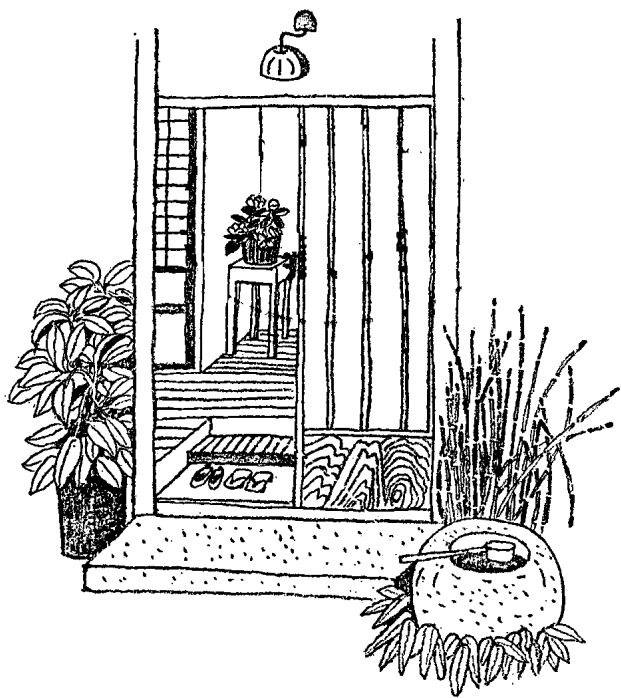
振替東京 8-7294

ISBN4-566-02200-5

〈検印省略〉

落丁・乱丁本は本社にておとりかいたします。 (A-1)

ふたつの家の ちえ子



日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

も

く

じ



	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11
あとがき	窓のあかり	あかいオーバー	小さな運動会	花子	海辺の町	雨降り	三角乗り	もらい湯	ふうせんガム	山の上の家
341	321		287	271	255	238	220	204	187	170
		304								

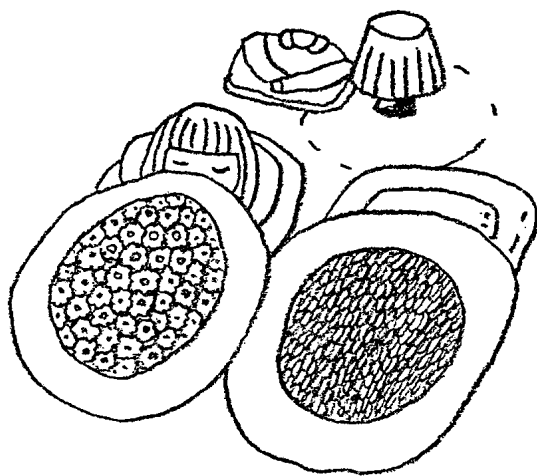
さし絵／装幀・著者



ふたつの家のちえ子



1. 子守りうた



「あーした天気になあれ！」

という声がひびきわたると、

うすむらさき色に暮れる春の空に、小さな運動ぐつが、いくつもほうりあげられました。ちえ子と、じゅん子とはるえの三人が、いつものように天気うらないをしているのです。

「はれ！」

「あしたもはれ！」

「あたしもはれ！」

ちえ子たちの大きな声は、村の四つ辻^{つじ}いっぱいひびきました。遠い山が黒い影^{かげ}のようになると、どこからかあまいモクレンの匂^{にお}いがただよってきて、いちばん星がきらっと光りまし

た。ほうりなげたくつのところに「けんけん」をしてゆく三人のすがたも、もう小さな影ぼうしでした。そのころになると、それぞれの家から、子どもたちを呼ぶ声が聞こえてきました。

ちえ子たちはなかよしでした。いつもいっしょに遊びました。でも一日のうちに、みんなが、とくべつになかよくなって、はなればなれになるのがいやになるのは、いつもきまって夕方でした。ですから、三人がいつまでも夢中になって遊んでいるようなときには、子どもたちのおかあさんがむかえにきました。すると、

「あつ、かあさんだ！」じゅん子が言い、

「かあさんだ！」はるえが叫びました。

そして、じゅん子とはるえは、それぞれのおかあさんのところへかけてゆきました。ちえ子もふたりといっしょにかけてゆきました。そんなちえ子に、

「もうおそいから、あしたにしようね」じゅん子のおかあさんが言いました。

「もうごはんの時間よ。ちえちゃんのばあちゃんも、ごちそうをつくって待ってるからね。はやくおかえり」はるえのおかあさんも言いました。ちえ子は元気よく、

「はあーい」と返事をして、

「じゃ、またあしたね」叫びながら家へかけてゆきました。

「かえるが鳴くからかーえろ」

じゅん子とはるえの、合唱するような声が遠ざかってゆきます。

いつでも、ちえ子の家の前では、おばあさんが目を細くして待っていました。

「あつ、ばあちゃん！」

ちえ子は大声で叫んでとびついてゆき、おばあさんのかっぱう着に顔をすりつけて、だいすきな、おばあさんの匂いをかぐのです。

でもときには、むかえにでるおばあさんよりも、ちえ子のほうがはやく帰り、家の前にだれもいないことがあります。おばあさんは年をとっていましたが、いろいろな仕事をするのに、人の三倍も時間がかかるのです。そんなときちえ子は、家の前から、もういちどじゅん子とはるえのあとを追いかけて、

「またあした！」

「またあした！」

ふたりの背中をぼん、ぼんとたたいてくるのでした。じゅん子とはるえのおかあさんは、おなかをすかしたふたりに、ぐんぐん手を引かれながら、夕方のおしゃべりに夢中でした。おかあさんたちはいつも、その日のできごとや、それぞれの子どもたちの話をしていました。ちえ子がそんなときにそばにゆくと、にっこり笑って、

「ちえちゃんは小さいのにえらいのね」と言ったり、

「おばあちゃんがやさしいからいいね」と言ったりしました。

ちえ子はいつも、こっくりと首をたてにふりました。でも、なぜじゅん子やはるえのおかあさ

んが、ちえ子のことを「小さいのにえらい」と言うのか、ちえ子にはわかりませんでした。ちえ子も、じゅん子やはるえとおない年の六つなのです。それに、おばあさんはやさしいにきまっています。でもそんなことは、ちらっとちえ子の頭をかすめるだけでした。ちえ子はただ、

「またあした!」と言って、最後のおみやげにじゅん子とはるえの背中を思いきりはたいて、

「やくそくよ! げんまんよ!」と叫びながら、家にむかってかけてゆきました。

ちえ子は、おぼえているかぎりのむかしから、おじいさんとおばあさんの家で暮らしていました。ちえ子の家には、おとうさんもおかあさんもいませんでしたが、ちえ子にとっては、それがあたりまえのことでした。ちえ子は、おじいさんを「じいちゃん」と呼び、おばあさんを「ばあちゃん」と呼びました。おじいさんとおばあさんは、ちえ子のことを「ちえ」と呼んだり「ちえ子」と呼んだりしました。

夕方、ちえ子が遊びから帰ってくると、おばあさんは、曲がった腰をさらにかがめて、「きょうは何して遊んだかい? みんなになかようしてもろうたかい?」とききました。

ちえ子に話しかけると、腰の曲がったおばあさんの顔は、小さなちえ子の顔のちょうどまんなきにくるものでした。ちえ子は、きょうして遊んだことをおばあさんに話しながら、

へばあちゃんは、いつもあたまの顔の前に顔をもつてこようとしてかがむから、あんなに腰が曲がってしまったんだ!と思うのでした。

おばあさんの腰は、もう少し曲がると折れてしまいそうほど曲がっていましたが、おばあさ

んは、ちえ子とおじいさんのために、することがいっぱいありましたから、いつでもくるくる動きまわっていました。食事のしたくをしたり、そうじをしたり、せんたくをしたりしましたが、何をするときも、「よいしょ」とか「どっこいしょ」と言いました。そんなときちえ子は、おばあさんと同じように腰を曲げて、「よいしょ」とか「どっこいしょ」と言いながらお手伝いをしました。するとおばあさんは、さもびっくりしたような顔をして、

「おう、おう。上手にできること。ばあちゃんはたまげた！」と言うのでした。

そのたびにちえ子は、ほんとうにえらくなったような気持ちになりました。

おばあさんの腰は、そんなふうに曲がっていましたが、もっと年よりのおじいさんの腰は、少しも曲がっていませんでした。でも、おじいさんの神経痛の右足には、つえが必要なのです。おばあさんは、おじいさんの悪い右足のことを、

「砂糖船さとうぶねに乗っていた頃ころにあたった、しお風のせいじゃ」と言いました。するとおじいさんは、「砂糖と塩しおがいっしょじゃ、足だっておかしくもなるさ。しかしまだまだよ。仕事さえあれば何回でも船をだすぞ。なんの」と言いました。

ずっとむかし、おじいさんは、砂糖を運ぶ船の船長さんだったのです。いまでもおじいさんは、金色のモールのついた白い麻あさの制服せいふくや、水牛のツノや、大理石だいりせきの置時計おきどけいなどを持っています。

夕ごはんのときなど、おじいさんはよく「ばんしゃく」をしながら、南の国のお話をしてくれ

ました。おじいさんがそんな話をするときだけは、部屋^{へや}にかけてある水牛のツノが、ぴかぴか光って見えるのでした。でもそれ以外^{いがい}のときには、そこにそんなものがあるのさえ、だれも思いだもしないのです。

ちえ子は、そんなおじいさんの話を、夢中^{むちゆう}になって聞きました。おばあさんのつくった夕ごはんは、とってもおいしいのですが、しぜんにはしがとまってしまふのです。口をあけたままで、じっと聞いてしまわずにはいられないほど、おじいさんのお話はおもしろいのです。するとおばあさんが、

「ほらほら。ままたろうがねろうとる」とちえ子に注意するので、おじいさんはお話をやめなければならぬのです。

「ままたろう」は、ごはんのときにだけ、どこからかやって来て、かみ^{かみ}の裏^{うら}にかくれているのだと、おばあさんは言いました。ごはんを食べているとき、ほかのことに気をとられていると、その子のごはんをぜんぶ食べてしまうのです。ままたろうは、かみ^{かみ}の裏^{うら}にかくれて、いつもそんなぼんやりした子をねらっているのです。ですから、おばあさんがそう言うとき、ちえ子はあわててごはんのことを思いだしました。そしてまずいちばんに、だいすきなたまごやきを、いそいで食べました。話を途中^{とちゆう}でやめさせられてしまったおじいさんは、もうなんにも言わず、ただおばあさんをじろりとにらんで、ぐびりとお酒を飲みました。

おじいさんの「ぼんしゃく」は、まい日とつくり一本と決まっていたましたが、ときどきおじい

さんは、今夜のように、

「ばあさん、もう一本」と言うことがありました。

そんな夜はたいてい、おじいさんが、むかしのお話をしたいと思う夜でした。おばあさんは、おこったような、笑ったようなへんな顔をして、お酒のおかんをし、あついつくりを、ふきんでくるんで持って来ましたが、やっぱりへんな顔をしたまま、

「てんぐが来なけりゃいいがね。今夜あたりは、やって来そうだよ」

ちょっとおじいさんをにらむようにして言いました。

「じいちゃん、てんぐは何しに来るの？」ちえ子がきくと、おじいさんは、

「ふん」と言って、せきばらいをするだけでした。

「ばあちゃん、てんぐは何しに来るの？」

おばあさんにきくと、おばあさんは声を小さくして、ひそひそと、

「てんぐはあかい顔をしてな、八つ手の葉を持って来る。八つ手の葉は、裏のお便所のところにはえとるじゃろが。てんぐは、その八つ手の葉を、ふわりふわりとうちわのようにあおいで、鼻たかだかと、あることないことほら話をするんじや。それがはじまると、家のものはだれも寝られんようになってな。それが朝までつづくんじや。朝になって、おてんとうさまがのぼって家のなかを見ると、ごはんも食べちらかしたまんま。お皿も汚れたまんま。それはみんな、てんぐのしわざということじや。てんぐが来ても、なんにもいいことはないという話じやよ。お酒のみの